The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	佛教傳來文獻に就いて
Author(s)	桑田, 六郎
Citation	懐徳. 1957, 28, p. 15-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90309
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

佛教傳來文獻に就いて

桑田六郎

後漢の明帝が金人を夢み、蔡愔等を天竺に遣わし、迦葉摩騰、竺法蘭の二沙門を得、洛陽に白馬寺が建てられ、四十二章經が譯されたと云う所謂漢明求法說は色々の面からその眞實性を疑われた。例えばマスペロ氏の說が大谷勝眞氏により東洋學報一の二に（明治四十四年五月）紹介された。次いで常盤大定博士が「漢明求法說の研究」を仝じく東洋學報一〇の一（大正九年一月）に發表され、漢明求法說の沿革及びマスペロ氏が取り上げた牟子の理惑論の製作年代を論じ、又四十二章經を東晉初期の作と云い、白馬寺の名稱は西晉末以後と推定された。白馬寺に關連して、大谷勝眞氏は東洋學報十一の一（大正十年一月）に「支那に於ける佛寺の起原に就いて」を發表された。その後白鳥庫吉博士は昭和十年五月に「佛教東漸の傳說」を講演された（西域史研究上卷所收）。白鳥博士は初め金人を解說し、秦始皇帝が造つた金人十二は紫微宮（北極星）の周圍の十二の星を象つたものであり、匈奴の休屠王の祭つた金人（後に霍去病に分捕られ甘泉宮に安置された）は北極星を神として象つたものであり、どちらも佛像とは何の關係もないことを明かにされ、漢明帝の感夢傳說はマスペロ氏の研究にゆづり、魏畧（三國志所引）に見える前漢の哀帝元壽元年（紀元前二年）に漢から景盧が大月氏國に行き、大月氏の伊存から浮屠經を口づから授かつたと云う話について、多くの東西の學者がこれ丈は事實だろうと言つているが、當時大月氏はバクトリア（今バルク）に居り、未だヒンヅークシュ山脈を越えて印度に入つて居らず、ゾロアスター教を信奉し佛教を信奉して居なかつたからこの說も信用出來ないとされた。そして後漢の明帝の時、楚王英が黃老の學を好んで浮屠を祀つたから、後漢の初めには佛教が傳つて居たことは疑えない

確實な事實であり、その傳來のルートは前漢書に見える罽賓、烏弋山離道で、東から行くと南道（崑崙山脈北麓）を通つて于闐（コータン）を通過し、タシクルガンから葱嶺（パミール高台）に入り、一はワカン谿谷に沿うて西北に行き大月氏の都バクトリアに達し、一は南下しギルギットを經てガンダーラ、卽ち罽賓に至り、更に西南烏弋山離（カンダハール）に至る。この二道の中で後者こそ前漢末に佛教が東漸したルートであるとされ、魏晷の元壽元年の傳說は、大月氏がヒンヅークシュ山脈を越えて、カーブル流域のガンダーラに都し、佛教弘法の大王であつたカニシカ王の出現後、人々の腦裏に佛教とし言えば大月氏と結び付いて考えられる時代卽ち後漢の桓帝靈帝の頃、西曆二世紀中頃安世高三（竺の誤）佛朔など連りに西域僧の來支した頃に成立した佛教傳說の一として見るべきであろうと云つて居られ、前漢末佛教が傳來したとすれば、前漢書の罽賓、烏弋山離道のルートでなければならぬと主張されて居る。換言すれば漢書の罽賓、烏弋山離道と云う西域交通路の記載から佛教が前漢末に傳來した考えられたように見受けられる。

さて漢明求法說は、常盤博士の研究によりて明かな如く、始め化胡經四十二章經理惑論等は使者を張騫として時代錯誤を公然犯して居り、梁の高僧傳に至り蔡愔に訂正するなど傳說そのものがたよりないものである。魏晷の傳說も白鳥博士により否定されて仕舞つた。殘るは楚王英の佛教信仰に關するものであるが、これはマスペロ氏常盤博士白鳥博士等いづれも是認されて居るが、これについて疑問を抱いてはいけないであろうか。

楚王英傳は後漢書卷七二にあるが、その他明帝靈帝の間に作られた東觀漢記卷二及び東晉の初め袁宏の作つた後漢紀卷一〇（四部叢刊）に英の記事がある。後漢書によると楚王英は明帝と同じく光武帝の子で、明帝とは母を異にしたが明帝が太子であつた頃から明帝と特に親しくしていた、年少の頃は游俠を好み賓客と交り、晩年には黃老の學を喜び浮屠の爲めに齋戒祭祀し、明帝が永平八年辟雍（大學）に臨み禮畢つて（後漢紀）死罪にあたる者をして皆縑を納入して罪を贖わしめる詔を下した時、楚王英は黃縑白紈三十匹（後漢紀黃縑廿五匹白紈五匹、東觀漢記黃縑卅五匹白紈五

四）を奉つて贖罪を願い出でたが、明帝はそれを受取らず、東觀漢記には、單に「詔書還入贖縑紈、以助伊蒲塞、桑門之盛饌」と記すが、後漢書には「詔報曰楚王誦黃老之微言、尙浮屠之仁祠、潔齋三月、與神爲誓、何嫌何疑、嘗有悔吝、其還贖以助伊蒲塞、桑門之盛饌」と記し、後漢紀は始めは後漢書と同じく唯「有何嫌懼而贖其罪、因還其贖」で切れ「以……饌」の文句はない。楚王英はこの後大に方士と交り金龜玉鶴を作り、文字を刻んで符瑞となし、永平十三年逆謀の密告あり、案驗の結果その罪を問われたが、明帝これを憫み楚王英を丹陽の涇縣に徙し、湯沐邑五百戶を賜わつたが翌年自殺した。

これによると楚王英は黃老の言を喜び、遂に方士に誤られたように見える。然し楚王英の佛敎信仰はこのまま信じてよいものか。老子と佛との關係は魏畧に「浮屠所載與中國老子經相出入」と記しているが、老佛の關連說を後漢の初めまで淵つてよいか。疑なきを得ない。但し浮屠之仁祠と云う語は袁宏の後漢紀にもあり、又三國志の吳志卷十九孫琳傳中にも「悔慢民神、遂燒大橋頭吳子胥廟、又壞浮屠祠、斬道人」とある。同じく吳志卷四劉繇傳に丹陽の笮融のことを記し大に浮屠祠を起したことを記す、それと畧同一の文が後漢書卷百三陶謙傳にもあるが後漢書の方は浮屠寺とかいている。仁祠の仁は佛敎の不殺生戒から來ていると思われるが、一面には黃老之微言に對して浮屠之仁祠と對句的な用法も考えられる。普通には孫琳傳の如く浮屠祠と云つたのであろう。又桑門という字は沙門という字より古いらしく、順帝の世に張衡が西京賦を作り、後宮の美人をうたい「展季（柳下惠のこと）桑門誰能不營（まどふ）」と記して居るから、桑門は後漢時代の用語と思われる。そうすると楚王英の佛敎關係の記事は後漢時代に作られたと思われ、明帝靈帝の間に作られた東觀漢記にその記事が見える點から桓靈時代楚王英の黃老信仰に附會して僞作されたものではなかろうか。

黃老信仰と佛敎信仰が結び付いて居るもう一つの例は、桓帝に就いて見ることが出來る。それを記すは、後漢書卷六〇下の襄楷の傳である。襄楷は「好學博古、善天文陰陽之術」の學者で、天文災異により宦官朝政を專らにするこ

となどを諫めた人であるが、その傳中に「又聞、宮中立黄老、浮屠之祠、此道清虚、尚無爲、好生惡殺、省慾去奢、今陛下嗜慾不去、殺罰過理、既乖其道、豈獲其祚、或言老子入夷狄爲浮屠、浮屠不三宿桑下、不欲久生恩愛、精之至也、天神遣以好女、浮屠曰、此但革囊盛血、遂不眄(眄か)之、其守一如此、乃能成道、今陛下婬女豔婦、極天下之麗、甘肥飲美、單天下之味、奈何欲如黄老乎」と上書したとある。此の文句は後漢紀にはない後漢紀は襄楷に關連して浮屠のことを云つていない。また此の文中の三宿桑下、好女、革囊の條句は四十二章經に類似していることは、鈴木宗奕氏の「四十二章經の研究」（哲學雜誌二六九、二七〇、二七一、二七三）に指適されて居り、常盤博士は鈴木説を更に批判されている(漢明求法説の研究)。鈴木氏は桓帝の時に現存四十二章經に類似し、若しくは其基礎たるべきものが存在し、已に教育ある範圍に多少行われた所から襄楷が之を引證したのであると云ひ、常盤博士は四十二章經の原形體が桓帝の時にあるを必要とせずとし、むしろ四十二章經の成立が吳支謙の瑞應本起經の後であると見た方が考え易い、目錄の研究の結論としては四十二章經の出現時代を早くて東晉初期頃とされた。

桓帝と老子との關係は後漢書卷十八祭祀志に「桓帝卽位十八年、好神遷、延熹八年初使中常侍之陳國苦縣、祠老子、九年親祠老子於濯龍、文罽爲壇飾、淳金釦器、設華蓋之坐、用郊天樂」とあり、卷七本紀にも「延熹八年春正月、遣中常侍左悺、三苦縣、祠老子」及び「延熹九年七月庚午、祠黄老於濯龍宮」と記す、東觀漢記卷三にも「立黄老祠北宮濯龍中云云」とあり、後漢紀は老子を濯龍中に祀ると云い黄老とは云わぬ。以上述べた所では老子或は黄老を祭つたことは明かであるが、襄楷の上奏に見えるような浮屠を祀つたことは見えない、但桓帝紀末の論に濯龍宮に「以祠浮圖老子、斯將所謂聽於神乎」と記している。此の論の文句は襄楷傳と關係あり、後者に本づいて書かれたと思われる。

然らば桓帝の佛教信仰は後漢書の襄楷傳が唯一の資料と云わねばならぬ。自分の考えでは襄楷が桓帝を諫めるのに佛教の教を借りなければならなかつたと云う點に大きな疑問を持つ。楚王英の場合と同じく桓帝の黄老信仰に乘じて

佛教信仰を附會したのではあるまいか。桓帝の佛教信仰は東觀漢記にも袁宏の後漢紀にも見えないから、後漢書襄楷傳の「又聞云々」の上奏文は後世の作爲ではあるまいか。

然らば佛教は何時頃中國に傳來したか。これは依然としてむつかしい問題であるが、明帝の次ぎの章帝建初年間の滕縣の拓本に佛畫でなければ見られない六牙象のあることを勞幹氏が紹介して居るのは參考になる（ハーヴァード大學、アジア研究雜誌、卷十七、一九五四年十二月）。

さて最後に佛教の傳來を、前後漢の西域經營と印度パンジャブ地方の狀勢から見るとどうなるかについて述べて見たい。

前漢武帝時代は張騫の大月氏派遣、李廣利の大宛（中亞フェルガナ）遠征、衞青、霍去病の匈奴征伐等あるが匈奴の勢力はなお存在し、西域交通が安全であつたは思えない。西域經營が緒についたのは宣帝の時代鄭吉が西域都護となつた紀元前一世紀中頃で、それから王莽が匈奴と爭を開くまで紀元前一世紀後半が西域交通可能の時期である。一方印度の方を見ると大夏（バクトリア）が大月氏に逐われてヒンヅークシュ山脈を越え、パンジャブのサガラに都しカーブルとパンジャブだけを支配するようになつたのは紀元前一三五年頃ヘリオクレス王の世であつた。王の次ぎに卽位したのがメナンデル王で、王は佛經（彌蘭陀經漢譯那先比丘經）のミリンダ王で、佛僧ナガセナと問答したと傳えらる。佛教信者であつたかどうか疑われても居るが、何れにせよその時代は武帝以前、西域交通未開時代であるから佛教の東漸は考えられぬ。然し佛教はパンジャプ地方に行われて居るとすれば、宣帝から王莽に至る紀元前一世紀後半期卽ち前漢書の罽賓烏弋山離道と云う西域ルートの開かれた時代に、白鳥博士の如く佛教東漸を考えられなくはないがパンジャブではメナンデル王の死後サカ族が勢力を獲たことを考慮に入れねばなるまい。後漢時代になると明帝の晩年に卽ち楚王英の死後に西域經營が復活し、西域于寘諸國が皆子弟を遣わし入侍させた。次ぎの章帝和帝の時代は班超の活躍時代で、西域五十餘國が漢に內屬した。此の時期卽ち紀元一世紀後半はパルチア人がパンジャブ地方の覇

權を握つて居たが、西域交通は前漢宣帝以後王莽に至る間より盛んであつたのではなかろうか。自分は佛教の東漸をこの明帝の西域復活後に置きたく思う。而してペンジャブ、カーブル地方はそのうちに大月氏の南下となり、カニシカ王の出現は佛教東漸に積極性を與えたと思われるのは、カニシカ王の年代には色々説があるが、ギルシュマン氏の二世紀中頃とするを正しいとすれば（世界歴史事典榎氏紹介）漢では丁度桓帝時代に當る。高僧傳を見ると、安世高以下の名僧達が續々渡來し始めたのは桓帝靈帝時代からとして居るのと併せ考えるべきであろう。